

# ハイデ

(第二十六回)

津田芳雄譯

はじめての山遊びで疲れてゐるから、早く家へ連れて歸つて休ませたかつたのである。

ペーテルが夕方デルフリに著いて見るさ、何だか大勢の人だかりがして、てんでに押し合ひへし合ひしながら、のび上つては人の肩越しに、地面の上の何かをしきりにのぞき見ようさしてゐた。ペーテルも、何だか見てやらうさ思ひ、肘で人々をかき分けて、進み出た。

ひざい目にあはせてやつたから、今頃はみんななつてゐるか見てやりたいさ思つてゐた當の敵が、目の前の草の上に横たはつてゐるのだつた。むざんにもばら／＼にこわれたクララの寝椅子で

ある。背中のみかかりの切れつばしき、まん中の部分さ、腰掛けの赤い切れが澤山さ、きん／＼光つた鋸さいづれをしても、こんなにならない前は、さぞかし立派な椅子であつたらうさ思はせるものばかりだつた。

「わしは人夫達がこれをついで上るさころを見てたんだよ。さう安く見積つたつて、二百五十圓はする代物なんだがなあ。さうしてこんなこゝになつたんだらうなあ」

ペーテルのそばに立つてゐたバン屋が云つた。「アルムをぢさんは、大方風の仕業だらうさ云つてたわよ」

女たちの一人が、感に堪へぬやうに赤い切れに  
見入りながら云つた。

「風で仕合せさ」パン屋が又云つた。「人間だつたら、ただぢやすまないからな。フランクフルトの且那の耳にでも入つて見ろ。早速取り調べがおつばじまらあ。わしはこの二年間さいふもの、一度も山へのぼらないから安心だけれき、そばにでも合はせた者は、ごんな係り合ひになるかわからないぜ」

そのほか、色々みんながてんで意見を述べ立てたが、ペーテルにはこれで澤山だつた。こそこそ人々の間をぐぐり抜け、まるで誰かに追ひかけられでもしてゐるやうに、大あわてに逃げて歸つた。パン屋の云つたこゝが怖くて、ひきりでに震へて来た。いつ何きき、フランクフルトからお巡りさんがやつて来て寝椅子の取り調べをするかわからない。さうなれば、きつこ何もかもわかつてしまつて、自分はフランクフルトの牢屋へ入れられるのだ。目の前にまささまそんな様子が浮び上り、ペーテルは身の毛もよだつ思ひだつた。家に歸つてもその思ひで一ぱいで、何を話しかけられても返事もせず、お夕飯のぢやがいもにも、

手を付けようともしなかつた。大いそぎで寢床にもぐり込むと、蒲團をかぶつて呻つてゐた。

「ペーテルは又すかんぼを食べたんだね。よつぼきお腹が痛いんだよ、あの泣き聲ぢや」

お母さんが云つた。

「お腹がすくから、そんなものを食べるんだらう。あしたは、わたしのパンもお辨當に入れておやりよ」

おばあさんは不憫さうに云つた。

その晩、クララミハイディはお床にはいつてから、竝んでお星様を眺めてゐたが、その時ハイディが云つた。

「わたし、今日いちんち考へてゐたのよ。わたしたちがいくらお祈りしても、もしか神様が、わたしたちの爲めにそれよりもつよいいこゝがあるとお思ひになつた時には、すぐに諾ないて下さらないこゝがあるのは、なんて有難いこゝだらうつて。あんたそんなこゝ思つたこゝあつて！」

「さうしてだしぬけにそんなこゝ云出したの。」  
「だつて、わたしフランクフルトにゐた時ね、ミても一生懸命に、神様にすぐ歸らせて下さいませつて、お祈りしたのよ。でもなかなか諾ないて下さ

らないものだから、神様はわたしのこまなんか、忘れておしまひになつたんだと思つたわ。だけぎ、ほらもしかあの時わたしがすぐに歸つてゐたら、あんたはここへも遊びに來ないし、そしたら、なほるつてこまもなかつたんだわねえ」

今度はクララの方が考へ込んでしまつた。

「だけぎ、そしたらハイディ、神様はいつでもあつたたちのこまをちやんご御存じで、何でもよくしてゐて下さるんだから、あたしたちは何にもお祈りしちやいけないこまになるわね」

「まあ、そんなこま考へちやいけないこまよ、クララ」

ハイディは一生懸命に答へた。

「わたしたちは、ごんなこまでもみんな神様にお祈りしなくちやいけないのよ。そしたら神様は、わたしたちが神様を信じてゐるこまを知つて下さるでせう？　もしかわたしたちが神様を忘れるこま、神様は一べんわたしたちを勝手にやらせてごらんになるのよ。さうするこま、わたしたちはきつて困るのよ。おばあさまが仰しやつたわ。神様が諾いて下さらない時でも、決してお祈りを止めちやいけないのよ。きつて神様は、もつこいいものを

きつておいて下さつて、おしまひにはなにもかもよくして下さるのだからと思つて、悲しがつたりしないで、いつまでもお祈りをつづけて行くのよ」

「そんなこま、さうして知つてるの？」

「二等はじめは、おばあさまが教へて下さつたのよ。そしたら、なにもかも、その通りになつたでせう。だから、わたしもほんたうにさうださ、自分でわかつたの。ああ、さうだわ、クララ」

ハイディはお床の上に取り上げた。

「あんたを歩けるやうにして下さつて、二人さもごんなにうれしんだから、早く神様にお禮を申し上げませうよ」

「さうね、ハイディ、ほんまにさうだわ。あたし、あんまりうれしくつて、もう少しでお祈りを忘れるところだつたわ」

二人の子供たちは、おもひおもひの言葉で、あんなにも長いこま病身で寝たつきりだつたクララを、歩けるやうにして下さつた御恵みを、神様に心からお禮申し上げた。

あくる朝、おぢいさんは子供たちに、珍らしいものをお目に懸けたいからおいで下さいと、おばあさまにお手紙を出してはさうかま云つた。けれ

ごも子供たちの計畫では、おばあさまをもつごびつくりさせたかつたので、クララがかなりの道をひきりで歩けるやうになるまでは、氣振りにも知らせてはいけないのだつた。それにはざれ位かかるかとおぢいさんに訊ねるご、一週間もあれば大丈夫だらうごのこごなので、子供たちはすぐさまペンをとり、おばあさまに大至急いらして下さいご、お手紙を書いた。でもお目にかけているものがあるなごごは、一ご言も書かなかつた。

それからの五六日は、クララが山で過ごしたごの日よりも楽しかつた。毎朝目がさめるご、心の中で誰かがうれしそうにささやいてるやうな気がした。

「もうなほつたんだわ、なほつたんだわ。もう寝椅子になんかねてゐないでも、ひきりでみんなごおんなじに歩けるんだわ!」

それから、歩くおけいこである。日増しにそれも樂になり、毎日少しずつ遠くまで歩けるやうになつた。山を歩きまはるので、何でもおいしくて、おぢいさんは毎日パンやバタの切り方を厚くして行くのだつたが、それでもまたたく間に消えてしまふのだつた。お乳は大きな壺に一ぱい入れ

て来て、幾杯も幾杯もお代りを注いでやつた。こんな風で一週間は過ぎて、いよいよおばあさまの山へのぼつていらつしやる日がやつて来た。

二十三、さようなら

おばあさまからは、前の日の日付けで、あしたきつご行きますごいふお手紙が、子供たちのごころへ届いた。その朝早く、ペーテルが持つて来てくれたのである。おぢいさんも子供たちも、もう外に出て、二匹の山羊ご一緒に、ペーテルの來るのを待つてゐた。山羊たちは元氣よく朝風に頭をふり立て、子供たちは「元氣に行つておいで」ご、やさしくその頭やせなかを撫でてやつた。おぢいさんはにこにこしながら、子供たちの生き生きした顔や、躰けのよい自分の山羊たちを満足げにながめてゐた。

やかてペーテルが登つて来たが、みんなの近くまで來るご、急に足もにぶり、おぢいさんの手に手紙を押し込むご、怖いもののやうに慌てて逃げ出し、誰かが後から追かけて來でもするやうに、後ばかり振り返りながら、一目散に山へ駆けのぼつてしまつた。